



社会福祉法人友愛学園  
広報誌 VOL. 37

発行日 令和3年3月26日  
発行人 社会福祉法人 友愛学園  
〒198-0001 東京都青梅市成木 2-107  
電話 0428-74-5453  
F A X 0428-74-6906  
<http://www.yuaigakuen.or.jp/>



## コロナ禍で忘れてはならないこと

理事長 河津英彦

コロナ禍で不自由な生活を余儀なくされている。令和三年を迎え、新型コロナウイルスの感染拡大は勢いを増し、今も第3のピークの最中である。

我々の仕事は、利用者の安全を守ることを基本とし、その上でどれだけ生活の中身を豊かにできるかを考え、支援に創意工夫を続けてゆくことである。新型コロナウイルスは、人が密を好み密によって生きてきたことに乗じた戦略をとる。

流行語大賞にもなった「3密」とは、「密閉」「密集」「密接」であり、これを避けることがワクチンや治療法の確立までの予防法といわれた。しかしながら、予防法はもう一つ「マスクと嗽、手洗い、消毒」がある。前者は空間的・組織的な方法であり、後者は個人的な予防法である。この他にも、温度管理、湿度管理がウイルスの働きに影響があることがわかってきたが、これは換気とマスク、空気清浄機が関係する。

以下に述べるのは、3密を避けマスクをすることによるコミュニケーションの不全や、ふれあいの減少が人の発達や心の安定を阻害し幸せに生きることを阻んでいることについて

である。支援関係において直接、対抗できる手段はなくとも、事実を見据えることにより関わり合いが少しでも変わってくることはないだろうか。

### 1. 顔が見えること

ある市の課長と喫茶店で会い、打ち合わせをすることがあった。薄汚れたアクリル板を挟んだマスク越しの声は聞き取りにくい。ところが運ばれてきたコーヒーストを飲むためマスクを外した途端に彼の口元がきれいに見えたのである。語尾が明瞭に聞こえるようになったのはマスクによる音の遮りだけでなく聴覚は視覚によって補助されていたことが身に染みてわかった。

私は高齢による聴力低下だが、聴覚障害の人や幼児の言語獲得について思いを馳せた。マスクは嗅覚も遮っているかもしれない。それに、表情が読みにくいことは弊害である。コロナ対策のマスクは鼻、口、頬を隠すが西洋のマスクカレードでは眉と鼻を隠す仮面になる。明治以前の日本の貴族や武家の女房のように眉をそり額に黛をつけるのも表情を見せないためである。

乳幼児は大人の表情を見て育つ。9か月になると、母親と自分は同じものを見ていることに気づく。共同注意という。そして、母親の視線の

先を見る表情で、どんな気持ちであるか知るようになる。社会的参照という。近年は乳幼児の研究方法が進化しかなり早い段階から人の心が育つことが分かってきた。

音声によるコミュニケーションは事実関係のやり取りはできるし、電話相談のように言葉に感情を乗せることもできる。しかし、メラビアンの『非言語的コミュニケーション』によれば、コミュニケーションにおける感情表現のうち言葉によるものは7%であり、声による表現は38%であり、顔による表現が55%なのである。

知的障害の世界で名高い糸賀一雄が滋賀県児童施設職員研修会の講義中に倒れ亡くなったのは昭和四十三年九月十七日である。この時の最後の言葉が「この子らに世の光をではなく、この子らを世の光に」であった。

しかし、その言葉の前に板書し説明しているのが仏教の経典にある「無財の七施」である。貧しい人でも七つの施しはできる。①眼是(げんぜ)人にやさしいまなざし②和顔悦色施(わがんえつじきせ)にこやかな微笑をたたえた顔③言辞施(げんじせ)言葉のうつくしき④身施(しんせ)勤労奉仕⑤心施(しんせ)感謝の心、ありがたう⑥牀座施(しょうざせ)席を譲る⑦房舎施(ぼうしゃせ)一宿一飯の施しである。表

情、言葉、行動によって暖かい心が伝わる。オンライン会議やマスクで顔を半分隠してどこまで可能だろうか。

## 2. ふれあうこと

青梅の成人部に行くとき女性利用者のYさんが「あんた可愛いね」と言っていて私を抱擁してくれる。大学教授時代にはパネルシアターの専門家である女性教員が笑って私の肩を叩いてきたことがある。喫茶店ではレジでお釣りをくれるときに手と手がふれあう。ささやかなふれあいが心を和ませる。

明和政子の『ヒトの発達の謎を解く』によれば、乳児の目を見つめ身体的接触の多い母親ほど「オキシトシン」（ホルモン）の分泌が高く、母乳も多くでるが、男性においても同様の傾向が見えるという。また、体に触れながら聞いた単語に対して乳児の左脳が大きく活動するという。さらに、9か月の乳児では毎秒2〜3cmで撫でられると心拍が安定し、注射などの痛みを和らげる。成人でも毎秒3〜10cmで撫でられると同様のことが起こり体の内部に心地よさが生じるという。

私の兄は、心臓に欠陥があり戸山高校の一年生で亡くなった。身長も高く、成長に伴い症状が出てきたためそれまで家族は気づかなかったの

である。見舞いに行くとき三歳年下の私に「ヒデ坊、握手しよう」と帰りに際に手を差し伸べ、危篤のベッドでは深夜に付き添っていた母に「心臓が止まっちゃうよ！ 本当に止まっちゃうよ！ お母さん手を握って！」と母の手を握ったまま亡くなっていく。親愛だけでなく不安の時も手は気持ちを支えるのである。

私にとって、もう一つ忘れられない経験がある。四十六歳の時、部長になるにあたって水道局に出た。2年にわたる熾烈な組合闘争の後、胃に生じたポリープを取るため胃カメラを飲むことになった。ベッドに横になり、嘔吐の連続で苦しんでいた私に、五十代と思える大柄な看護師が「すぐ楽になりますよ」と優しく腰をたたくてくれた。途端に気持ちが悪くなり、胃カメラはすーと喉元を通り過ぎた。その時、私は間違いない赤ちゃん返りをしていった。幼いころ母に抱かれていた状態に戻ったのである。安心とともに深い満足感に包まれていた。

体に触れることは視覚障害の人にとても重要なコミュニケーション手段である。『目の見えない人は世界をどう見ているか』を書いた伊藤亜紗は『手の倫理』で「さわる」と「ふれる」の違いを論じている。「さわる」は人を物として扱いつつ「ふれる」は「ふれ・あう」というように共感的でいつくしむような情緒的な

交わりと説明している。

## 3. 共に生きること

十数年前、名古屋でタクシーに乗った時、妻を最近亡くして淋しいという高齢の運転手が「姉から、東京に来て朝の満員電車に乗るといいよ」と言われたと話してくれた。子どもの頃の押しくらまんじゅうを思い出した。冬場に、背中をくっつけてあって隣同士腕を組み押し合う。遊びでありながら何か安心感があった。昔、民族音楽の研究者である小泉文夫は、パプアニューギニアの先住民が他の部族と戦う時、出陣式に声を合わせて歌うという話をしていて、ハーモニーが生まれ心が一つになって初めて戦えるのである。ラグビーでニュージーランドのオールブラックスが競技前に踊りながら歌う姿に元は戦いの儀式であったことを思わせられた。

ライブハウスに集う人、サッカーのサポーター、ノーベル賞の発表を待つ村上春樹のファンたちなど時間と場所を共有し同調することの楽しさは人類にとって共通である。

ゴリラの研究者である山極寿一は、共生社会の起源として①共同で狩りをして平等に分け、一緒に食べる「共食」と②大きく生まれ、母にしがみつけない乳児を共同で育てる「共同子育て」を挙げ、霊長類の中

でも人類だけの特徴であるという。ソーシャルディスタンスとは、本来、人と人が適切な距離を保ち、独立した個人が、お互いをよりよく生かしあうために関わりあうことである。友愛という学園の語源もそこにある。排他的な愛である恋愛とは異なる開かれた愛である。



# 良質な福祉サービスを 安定的に継続していく ための人材育成

事務局長 内山 敏

2020年は、社会全体が新型コロナウイルスに翻弄されました。当法人も年度当初の四月早々に直接、

その洗礼を受けることとなりました。私の好きなF1も七月からの開催となり、プロ野球は六月後半の開幕となりました。そのプロ野球は、ソフトバンクの4連覇で幕を閉じました。これは、1965〜73の巨人の9連覇以来、実に47年ぶりのことでした。毎年、引退する選手、解雇される選手がいて、フリーエージェントによって移籍する選手、ドラフトで新入団する選手など、チーム編成は毎年変化します。その状況にあって勝ち続けるということは、選手が入れ替わっても勝ち続けるためのチームとしての水準を維持しながら、毎年レベルアップを繰り返しているということの証でしょうか。

日本の多くの会社には、定年制度があります。多分、どの法人にもあるのではないかと思えます。当法人にもあります。それは、一定の周期で職員が入れ替わっていくことを意味しています。通常多くの場合、職

階の上位者が替われば、その下の者が昇格し、それに伴い下位の者の中から順次、昇格していくことになるのではないかと思えます。事業所や部署が多ければ、異動も含めて複数の動きが生じることもあるでしょう。現実的な問題として退職していく職員もいるでしょう。そして、毎年のように新しい職員が就職してくるのではないのでしょうか。

人の入れ替わりは、新しい風を吹き込み、組織が新陳代謝していきま。組織の新陳代謝がなければ多くの場合、その組織は停滞すると思われる。しかし、世代交代していく中でも組織として伝え続けていかなければならぬ普遍的なものもあると考えます。友愛学園は比較的、指導職・管理職への登用年齢は高い方であったと思います。しかしここ数年、年齢が下がってきています。二十代半ばの指導職、三十代半ばの管理職がでてきています。このことはこれまでとは違い、様々なことを覚え習得していくための期間が短くなってきていることを意味しています。

2015(平成27)年度に開始した人事考課制度を昨年度から一年間かけて見直しました。一番の改正は、給与制度との連動を改め、昇格のみ

2019(平成31)年2月に職員

アンケートを実施し、その結果を5項目にまとめて報告しました。見直し点の代表的意見は給与への反映の廃止でした。職員はチームとなって仕事をしており、直接的な給与への反映は職員間の不穏を招くだけであるという意見が象徴的なものでした。良かった点として面談と目標の設定があげられていました。

今回の見直しにあたり、人材育成を推進していくツールとして「職務能力基準書」と「目標支援シート」を修正していくツールとしました。職務能力基準書は、ルーブリック評価の方法に基づき、法人が求める職員像が伝わるように評価項目に落とし込みました。大項目を「利用者支援」「保護者・関係機関連携」「内部管理」の3項目とし、それぞれの評価項目は、8項目・3項目・8項目に絞りました。指導職は、独自に4項目加えました。評価尺度は、A・B・C・Dの4段階とし、評価規準(ノリジョン)にはできる限り具体的な記述をして、人によって解釈に相違が生じないようにしました。目標支援シートの書式は、シンプルなものにしました。目標支援シートと職務能力基準書は連動しており、目標設定は評価項目からの選択として

ourselvesの人生を生きています。仕事はその一部です。目標設定は、職業人

としての自身のキャリアビジョン(個人の目標)と、獲得したスキルで利用者や組織にどう貢献していくか(組織の目標)という視点での作成になります。

そして、今回何より重要視されるのが、面談です。面談者は主任と管理職で、年度初めの目標設定面談、年度末の期末面談を行います。期末面談では、職務能力基準書の自己評価と面談者の評価の現状認識の擦り合わせを対話により行い、そこから次年度の目標へとつなげていきます。面談者は、育成者としての側面を強く意識しなければなりません。自分は仕事ができるというだけでなく、如何に職員個々のやる気を引き出し、能力を伸ばしていくのかを考えなければなりません。正論を頭ごなしに伝えるだけでは指導職とは言えません。まして管理職としては失格です。うまく物事が機能していない時には、自分の伝え方に問題がなかったかと振り返る謙虚さが必要です。

BeatlesのWhen I'm Sixty-Fourという楽曲がありますが、当法人は来年度64年目を迎えます。その年度にスタートするこの制度が、これからの10年、20年と友愛学園が良質な福祉サービスを安定的に継続していくための人材育成の基盤として機能していくように進めていきたいと思

## 事業継続について考える

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、改めて事業の継続性と質の担保について考えさせられる一年となりました。

これまでも、インフルエンザウイルスやノロウイルスなど、事業の継続を阻む要素は存在していましたが、今回のように大きな影響を及ぼした因子はありません。事業所内での新しい生活様式、日中活動や余暇の在り方など、継続的な検討、試行を行ってきました。いくつかの対応実践をご報告いたします。

一つ目が、これまでも報告しておりますが、「備える」ことです。既存の防災倉庫では足らず、新たに防災スペースを設け、そこには感染症対策から大規模震災時における備蓄品、福祉避難所の機能を担保する整備を行います



した。

二つ目が「変える」です。成人部の新たな生活・活動様式を検討しました。従前よりユニットケアを実践していますが、利用者間の動線をよりシンプルに、ユニット間の交わりを極力少なくする対応を行っています。

余暇支援においても同様に、個別化や少人数化を図り、万が一ウイルスが浸入した場合にも、感染拡大を食い止めるよう、ご利用者や職員には行動変容をお願いしています。特にこの実践においては、ご利用者には不自由を掛けていますが、可能な限り、これまで同様の喜びや楽しみを提供するよう努めています。

工房YUAIの作品展や、活動紹介にも影響が生まれました。四月に開催予定であった作品展は中止になりました。そんな中でも次々と生み出される作品を如何にして皆さんの手に届けていくか検討した結果、新しい広報活動として、工房YUAIのWEBサイトの構築が予定されています。WEB作品展のページも設けていき、アクセスビリティが難しく、従前の作品展にもお越し頂けていない方々への広報の場としても活用したいと考えています。

三つ目に、「改める」です。「変える」いくつかの実践においては、施設整備が必要となりました。内容ごとにグループ分けしていた日中活動

は、ユニット毎で再編したため、活動スペースの変更が余儀なくされました。フロアの改修や車いすトイレの増設、職員の増配置が求められました。

事業の継続、質の担保において、新型コロナウイルスによる影響だけではなく、自然災害、利用者の状態の変化（重度高齢化）、職員の確保および教育も進めていかなくてはならないと感じています。集中豪雨や台風への対策、介護技術向上のための研修会、動画などによるWEB研修会への積極的参加、個別学習環境の提供、有事の際にも対応できる職員体制づくりを行っていきたいと考えています。

（成人部施設長 宮崎啓太）

## サテライト型住居支援レポート

グループホームで生活している女性利用者が、一人暮らしを希望されました。一人での生活に向けた訓練の場として、昨年度二月から、サテ



ライト型住居の提供を開始し、定期的な訪問や日常的な相談、金銭管理、通院同行などを行っています。

彼女と初めて会ったのは今年度の四月でした。私自身、四月に地域支援部に異動となり、同時にコロナウイルスの流行がありました。お互いに日常が変化し戸惑う中での対面となりました。初めて会った時、同一年ということもあり、お互いどこか恥ずかしく、会話はとても少なかったことを憶えています。

訪問を重ねていくうちに、彼女の笑顔が多くなり、沢山話をするようになりました。仕事でのこと、友達のこと、趣味のことなど、いつでも彼女は前向きに、一人暮らしに向けた努力を重ねています。

苦手であった居室清掃も概ね良好に行えています。

これからの課題は、金銭管理や通院、健康管理など、全て自分でできるよう自立をすることです。私たちの支援に代わって、新たな社会資源やサポートを得ながら、自立していくこととなります。

先日の通院で、医師から「最近笑顔が増えたよね」と言われ嬉しそうにしていた彼女を、支援員として、同世代として応援していきたいと思

（地域支援部 松本すずか）



## コロナ禍でのイベント

児童は、さまざまな経験を通して、成長をしていきますし、私たち職員も、そのような機会を設けられるように、日々、考えて支援をしています。児童部での様々なイベントは、児童と一緒にアイデアを出し合いながら、計画して、実施し、児童の想いに寄り添い、イベントを成功させることで、児童の自信や自己肯定感に繋がるように取り組んでいます。

秋から冬にかけては、例年、児童部ではイベントが続き、児童も楽しみにしているのですが、現在のコロナ禍では、今までのような外出してのイベントを計画することはできません。今回の広報誌では、児童部のコロナ禍でのイベントを報告させていただき、児童の笑顔のため、限られた状況の中での支援の一部でも知っていただく機会になればと考えています。

### 【秋のお楽しみ会】

毎年、遠足の行先や内容は、児童の希望を聞いて、限られた予算内で、いかに児童の希望に叶う場所を見つけてくれるか、職員はアイデアを出し合います。今年は遠足そのものに行けないという難題が降りかかってきました。

さて、どうしようと考えたとき、園庭で、身体を思いっきり動かす企画はどうだろうと考えました。せっかくだから、今後も使用できる外遊びグッズを準備し、一日だけのお楽しみではなく、休日には児童が外遊びを楽しみ、少しでもストレス解消に役立てられたらと思いました。

『今どきの子ども』はデジタルゲーム機やスマートフォン、ユーチューブなどには、小さい頃から親しんでいます。しかし、広い原っぱで身体を動かして遊ぶ機会はあまり経験していません。そこで、遠足の代替行事である秋のお楽しみ会は、『むかし遊び』をテーマに行うことにしました。

職員が手作りしたジャンボボーリング、バトミントンや野球など複数の人数で関わる遊びやエアプレーンやホッピング、竹馬など発育にも役立つような遊具を準備し、それぞれ好きなものを好きなように使い、身体を動かして、秋のひと時を過ごしました。その後、デザートバイキングと称して、たくさんおやつを食べ、おなかも満喫することができました。

遊具、デザートバイキングのおやつ等、(株)リコー社会貢献クラブ・FreeW三様からのご寄付で準備させていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

### 【クリスマス会】

例年のクリスマス会は保護者やボランティアと楽しいひと時を過ごしていますが、今年は一味違うクリスマス会となりました。

十一月に利用者会議を開き、改めて児童に状況を説明し、今までと違ったクリスマス会になるが、どんなことをしたいか意見を出して貰いました。歌を歌いたい、BGMを編集したい、ダンスを披露したいなどの意見が出ました。また、職員間でも児童へのサプライズプレゼントとして、『ペープサート』や衣装を身にまとった男性職員の『ストレッチャーズ』を披露することになりました。

ケーキやチキンをおいしくいただき、児童による『パプリカ』のダンス、児童からの希望の『オルゴール演奏』、そして、毎年恒例で一番のお楽しみみのサンタクロースからプレゼントとたくさんの時間を過ごすことができました。

今後、イベントをどのように開催できるかは分かりませんが、児童の



笑顔のため、さまざまな経験をしてもらうため、アイデアを考えていきたいと思えます。(余暇委員会 高橋祐人)

### とことん

創作活動が生きるとき

とことんでは、季節やイベントごとに作品を作り、ご家庭に持ち帰っていただいています。この冬には、季節感たっぷりの『スノードーム』作りにクリスマスをテーマに取り組みました。

児童には、雪だるまや赤いブーツ、リースなどのイラストを見せてイメージをしてもらい、後は個々の児童の感性にお任せです。雪だるまを見ながら一生懸命描く児童、線の色を赤や緑に変えながらブーツを描く児童、くるくると色鉛筆を動かす児童など『絵を描く』様子は十人十色で個性が光ります。

私たちが創作活動を行う際に大切にしていることがあります。児童が作っていて楽しい作品。個性が光り輝く作品。そして、ご家族が作品を通して児童の姿や気持ちに思いを巡らせ、親子の交流が生まれる作品であることです。ご家族の笑顔や「部屋に飾っています。」という言葉は職員を支えとなっています。

(とことん児童指導員 富田祐子)

## はあとぴあ原宿

今年度もあと少しとなりました。令和二年は、新型コロナウイルス色の一年でしたが、改めてこの仕事に関わる自分の思いや考えと向き合う時間になりました。

福祉の仕事は、サービス業のひとつと考えています。命を守ることはもちろんのこと、利用者の方々にとりだけ楽しい時間を提供できるか、そのためにどれだけ求めているものを私たちが感じられるか、工夫できるか、どのような状況であってもそのことを最優先に考えていかなければならない。この状況下で自分が、施設ができることは何か、引き続き来年も悩み続ける課題です。

さて、令和三年四月には、恵比寿二丁目に開設される複合施設内で、生活介護事業（定員20名）がスタートします。オリンピック・パラリンピックも開催予定で準備が進められ八月には、はあとぴあ原宿でパラリンピックの採火が行われる予定です。今年は何のような一年になるのか、不安もありますがいろいろな可能性を考えつつ、今、このときを楽しみむことに全力を尽くしていきたいと思っています。

（施設長 平井眞琴）

## はあとぴあ原宿

（施設入所・生活介護）

ハロウィンは館内（2階・3階）で楽しみました。張り子のボールは割れると紙吹雪が飛び出します。



屋上の野菜の繊維から、繊細な和紙作りも行っています（右が落花生左が玉ねぎ）。入口の創作屋台には、その和紙で作ったカードやおでんの具が並んでいます。



藍染でマスクも作りました。モノ作りを通じて今日もお客様をお迎えます（1階）。



（成人 副施設長 板沢純子）

## はあとぴあキッズ

代々木の杜ピア・キッズ

今年度も児童発達支援ガイドラインに則り、保護者向けのアンケートを、コロナ禍の令和二年九月に実施致しました。お忙しい中、アンケートに協力いただき感謝致します。

今回、アンケートの内容については、コロナウイルスの影響を大きく受けた結果となりました。主に3つのこと

- ① 他機関との連携の有無
- ② 保護者プログラムについて
- ③ 避難時や災害時の対応について

①、②については、感染拡大を抑えるため、他機関との直接の連携や、保護者会、毎年行われている療育講座など、多くの予定や行事が中止となり、保護者の方々に不安や心配な思いをさせてしまったことをお詫び申し上げます。

③の避難時、災害時の対応では、感染防止に努めながら避難訓練を、原宿のはあとぴあキッズでは九月に、代々木の杜ピア・キッズでは十一月に行いました。時間や曜日の関係もあり参加できなかった方も大勢いらっしゃいました。訓練についてはより多くのお子さんに参加、そして保護者の方に周知していく必要性を感じております。

ただ全体的には皆さんのあたたかいご意見と評価で満たされていたことを心から感謝致します。アンケート結果については、今年度中に区のホームページに掲載されるので、ご覧ください。

今年度は感染防止を行いながら、どう療育を安全に行っているのかというところで、その時の最善の策を考えてきました。新しい療育の形が求められる中で、恒例の芋掘り、ハロウィンやクリスマスなど行事を通じて、お子さんの笑顔が印象的でほっと癒されました。



ケーキの作成



季節の飾り付け

お子さんの笑顔を励みに今後も新しい療育の形を模索していきたいと思えます。

皆様のご意見が事業所をより良いものにしていきます。アンケートに限らず、普段から気になることがあれば、お知らせ下さい。

（児童 副施設長 安藤 健）

## 青梅福祉作業所

今年度当初は新型コロナウイルスの影響で作業収入が大きく落ち込みましたが、令和二年三月から本格的に取り組みはじめたガス給湯機の分解作業が順調に成果を上げて、この作業を導入するときにあわせて活動をやめた霊園清掃作業の月額の平均収入を三か月目には大きく超えて、平均収入月額も三倍になりました。

この作業は兵庫県に本社がある株式会社ノリツが推進する「障がい者福祉を企業の事業活動で支える企業型障がい者福祉モデル」です。当初は関西を中心に事業展開されていましたが、関東地区にも埼玉県浦和市に拠点ができて、埼玉、東京、千葉、神奈川、茨城などにある就労継続支援B型事業所が取り組み始めました。東日本大震災の仮設住宅撤去に伴って大量にガス給湯機が廃棄されたときは、東北拠点も設けられました。



給湯機の中は精密な部品がぎっしり詰まっています。また、銅やアルミ、チタンなどの金属も使われており、そうした金属



を分別していく作業です。長年の外作業で鍛えられた利用者の方たちを中心に手際よく分解されていきます。

使う道具は5kgもあるハンマーや平タガネ、プライヤーなどを使います。力がある作業なので当初はみなさん疲れ切っていました。半年もたつと立派な腕っぶしに成長し、初心者



の職員が一台分解する時間で四〜五台を分解してしまします。また、電動インパクトドライバーなども使いこなして

なしていますが、令和二年度の善意銀行でエア工具基本セットをご寄付いただきました。ありがとうございました。青梅福祉作業所は多摩西部と飯能・入間・所沢を担当していくこととなつています。そして、年間収入を五百万円超という目標を立てて工賃アップを目指します。

(所長 福田和弘)

## 青梅市 障害者就労支援センター

昨年の年明けから、ニュースの冒頭では必ずと言ってよいほど「新型コロナウイルス……」というフレーズが枕詞のように聞かれるようになってから一年以上が経過しました。

日常生活や仕事に対して、私たちが本来向けなければならぬエネルギーが、コロナ関連に大きな比重で消費してしまい、本来のパフォーマンスを見失っている人もいることと思います。

このような状況ではありますが、考えようによっては悪いことばかりではなく、今「新しい生活様式」を強いられる中で、趣味や娯楽の新たな楽しみ方や、隠れた自分の才能に初めて気づいた人も多いのではないのでしょうか。

「アフターコロナ」と言えるのかはいろいろな見解があるとありますが、ワクワクの接種が医療従事者を中心に始まり、ごく近い将来治療薬が整備され、ある程度コントロールできるような状況になったとしても、ウイルス自体が消滅することはないように思います。従って私たちの行動全般が、以前の状態に完全に戻ることには考えにくいのではと個人的には考えています。

こういった状況を踏まえて、就労支援センターでも、「新たな支援方法」を模索していかねばなりません。就労支援機関は、基本直接支援ではなく、利用者との面談や、関係機関への連絡および訪問が主な業務となりますので、工夫できる幅は広いと思います。

企業の求人数は都心部を中心に少しずつ回復してきており、採用面接をオンラインで実施するところも増えてきています。この手法はコロナ終息後も残っていくことでしょう。就労支援センターでも、関係機関との会議や研修についてはオンラインを利用し始めています。

通常面談にも活用を開始しましたが、希望される利用者が意外にも多かったことには少し驚きました。電話やメールと違って、相手の表情やしぐさが対面時と同じようにつぶさに確認できますし、利用者の時間や交通費等の削減にもつながるため、メリットは大きいのではと考えます。今年度も残りわずかとなりました。「新たな支援方法」については、「変えていくべきこと」と、「変えてはいけないこと」を色分けし、より効果的、効率的な手段を検討してまいります。

(所長 中村俊久)

**成人  
案内** お知らせ

障害者の差別解消・理解促進を目的として昨年開始した Action Art Project の Web サイトとして YUAI PLUS を発足することになりました。これは障害を持つ人の魅力を発信できるよう、写真や言葉を通じて障害者の理解を深めるものです。成人部ではこれまでの活動として、展覧会やワークショップの企画・運営、自主出版の活動など、障害を持つ方の表現物を軸とした「ものづくり」を展開してきました。Action Art Project では、タブロイド紙を発行し都内美術館などに配布を予定していましたが、コロナ禍において、これまでの手法では、効果的な取り組みができなくなってきました。新たに構築する Web サイト YUAI PLUS にて、コロナ禍においても、安全かつ効果的に、障害を持つ人の魅力を発信できるよう取り組んでいきます。

ホームページの内容は、友愛学園成人部の ART 作品紹介、制作過程の説明、日中活動の風景写真、イベント関係等で、近日公開予定です。

**成人  
報告** 作品展「世界を物語る」

会期・令和三年一月三十日～二月二十八日  
会場・カンザンギャラリー（千代田区）

上記の Action Art Project の一環として、カンザンギャラリー様企画の成人部利用者作品の展示販売が開催されました。

緊急事態宣言下での開催となりましたが、利用者のご家族の他に、福祉事業所関係やギャラリー関係など、今までにない層の方々にも多数ご来場いただきました。



**渋谷  
報告** お礼

毎年、クリスマス会で音楽の演奏をしてくださっている、ポランティアさんたち（株式会社デンソー様）から、今年はコロナ禍で伺えないのでと、素敵な贈り物をいただきました。電子ピアノとツリーチャイムです。また、皆様が、はあとぴあ原宿にお越しいただける日が早く来ますようにと願いながら、ご紹介いたします。



**令和二年度  
寄付者御芳名**

五十嵐康・五十嵐肇・金子信也・株式会社ウチダシステムズ・株式会社釜屋・河津英彦・桐生麻理子・ゼンチ株式会社・榎デンソー・松本浩毅・吉岡電気管理事務所・吉岡正夫・米村明史・児童部保護者会・成人部保護者会・匿名希望  
（順不同・敬称略）

今年度はコロナの影響がある中で、皆様から寄せいただきましたご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。

また、他にも多くの方々から子供たちへのお菓子やおもちゃ等たくさんのお心遣いをいただいております。心より感謝申し上げます。

**編集後記**

昨年、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、次第にワクチン開発の話が始まると新聞やマスメディアなどで度々、レイ・バスターという人名を耳にしました。ちょっと調べてみたところ、ワクチンの予防接種という感染症に対する予防法を開発したフランスの生化学者だそうです。その中で、「一瓶のワインの中には全ての書物よりも多くの哲学が存在する」という本人が残した言葉を目にすることができました。

コロナ禍で、気持ちの面で気を張ることも多く、人の暮らし方にも変化があったりと人生観や価値観など様々なことを考えさせられる一年でした。

「たまには難しく考えてばかりではなく、ワインを片手に考えるくらいの方が、ずっと良い結果に繋がることもあるよ。」と菌や微生物などマクロな研究をしながら、フランスの研究者ならではの名言だなと少し穏やかな気持ちになりました。みなさんはいかがでしょう？